希望を求めて

AMDA30年 ③

東北支援

復興グルメF―1大会

人とのつながり財産に

市街地跡に草が高く生い茂り、盛り土用の土を運ぶ巨大なベルトコンベヤーが目に飛び込む。2011年3月11日に発生した東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県陸前高田市。国際医療NGO「AMDA」（北区伊福町3）が被災地支援の一環として続ける「第7回復興グルメF―1大会」が先月13日、陸前高田市内の小学校で開かれ、県内外から来た多くの人たちでにぎわった。

「復興グルメ」は、今春まで東北に滞在し、被災地支援を統括してきたAMDA職員、大政朋子（おおまさ）さん(42)が、「被災地同士の交流に」と現地の商店主らと発案した。岩手、宮城、福島の「被災3県」から商店街単位で参加者を集めてきた。オリジナルメニューの料理を一皿300円で振る舞ってもらい、来場者による投票で順位を競う。昨年1月に始まり、今回は被災3県から最多の16チームが出場した。

「石巻ホンゴレ焼きそば」「さんさんタコバーガー」「あんこうのから揚げ」……。蒸し暑い中、食欲をそそるメニューに長蛇の列ができた。おいしそうにほおばる来場者の一方で、売り手は真剣だ。風評被害を乗り越えて参加した福島のチームがあった。人口のほとんどが流出した沿岸の町からの出店者もいた。「あと10分だ！」。終了ぎりぎりまで売り切ろうとする姿は、人生の何かを懸けているようだった。

「『もっともっと（売りたい）』という気持ちは、自分たちのまちづくりや、商店街づくりにも役立つと思う」。陸前高田市内の仮設商店街「高田大隅つどいの丘商店街」で飲食店を営む大会実行委員長の太田明成さん(47)は、そう話した。

なぜ大会に集まるのか。「来場者を元気づけたい、というだけじゃない。他の被災地の人とのつながりが財産になるし、好きだから」。出店者自身が、エネルギーを得ていた。

大会を違った視点で見ている人もいた。AMDAが岩手県大槌町に開いた「大槌健康サポートセンター」職員で、大会の運営を手伝った賀谷安美さん(24)。県外から集まったボランティアを見て「思いを持って東北に入ってくれて、ありがたい」と目をうるませた。自身も家族と仮設住宅に住む被災者だ。センターでは、仮設に住む人たち向けの体操教室などを開いている。

「『復興』の一言のために頑張ってきた人たちが、疲れ始めている。見えないゴールに向かって走るみたいなもの」。菅谷さんは、被災地の人たちの心情をこう表現する。「『これをやれば復興する』という正解はないんです。被災地の外の時間はどんどん過ぎていくけど、被災した人の心の傷は癒えない」

被災地で、必死に闘う人たちがいる。支えようとするAMDAの模索も続く。

【五十嵐朋子】

「復興グルメF―1大会」では、県内外から集まった人たちがオリジナルメニューを買い求めた＝岩手県陸前高田市の市立高田小で今年7月13日

AMDAの東日本支援

2011年3月の東日本大震災の発生直後から、AMDA職員やボランティアの医師らによる緊急救援チームが巡回診療などにあたり、被災した病院への医師や看護師の派遣も続けた。現在、大槌健康サポートセンターの運営のほか、被災地と岡山の学生同士の交流イベントも開いている。「復興グルメ」では毎回「ボランティアバス」を運行。岡山から一般ボランティアを乗せて行き、運営を手伝ってもらう。